

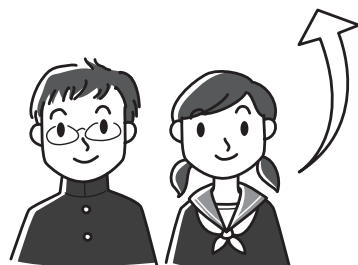
第 3 章 大学で学ぶ意識と意義

大学では、高等学校で学んだことのない全く新しい分野や、より高度で専門的な知識を学びます。高校時代に「正解」であった事柄が、実は「間違い」ないしは「他にも正解がある」ということを教えられることがあるかもしれません。なぜならば大学では専門家集団が最新の研究をしており、その成果は授業をとおして皆さんに還元され、皆さんは最新の知識を修得することによって、自身の付加価値を高めてゆくからです。

1 大学で学ぶということを考えるうえで、高校と大学の違いを確認しよう

大学と高校は違うとよく言われますが、本当のところどこがどのように違うのかをきちんと認識することが、有意義な大学生活を過ごす出発点になります。中学・高校までは皆さんは「生徒」でしたが、大学では「学生」になります。名は体をあらわしますから、名称が変わるということは、中身あるいは実体が大きく異なることを意味します。単にひとつ歳をとるとか、入試というハードルを越えただけではありません。「学生」はstudentの日本語訳ですが、studyと関係がある語だと推察がつくでしょう。ラテン語（ローマ帝国の言語で、かつてはヨーロッパの共通語でもあった）の studiumから生じた語ですが、studiumの本来の意味は「熱意、情熱」で、派生的に特に「学芸へ打ち込むこと、学問への熱中」の意味があります。普通の英和辞典にもstudentには「＜ある分野に＞強い関心を抱いている人、研究家」といった意味が出ていでしょう。[ここで、「本当かな?」と思って、英和辞典を引いてみる人は、好奇心と探究心の点から「学生」の有資格者です。]

大学生になるということは、いろいろなことに強い関心を持って探求する人たちの仲間入りをすることを意味します。その種の熱意を持った人々（教員と学生の両方ですが）と「場を共有して」、新たな知識を獲得し、知恵をはぐくみ、教養を深め、友人をつくり、自らを自ら育て上げ、将来的に社会へ還元するのが「大学」でできることです。皆さんにとって計り知れない価値のある「チャンス」が与えられたと考えるべきで



しょう。現在の日本ではほぼ5割の人が大学に進学しますが、「世界が100人の村だったら（“If the World Were a Village of 100 People”）」によれば、世界中で大学教育を受けている人は「たった一人、たった1%」にすぎません。

大学で皆さんは、「自らの自由意志にもとづいて判断し、行動し、責任をとること」を基本的に求められます。つまり、1人の個人としてともに社会生活（大学も社会の一部です）を支障なく送ることができるようになるための準備をします。最も重要なことは「問題を見つけ出す能力」と「解決に導くための方法」であって、結論そのものではありません。結論は時代や状況によって変わるものです。何が問題であるかわかれば、解決の方法はさまざまですが、何とかなるものです。大学の教員のすごさは「調べる方法」に長けていることです。方法を知らないと何もできません。高校までは問題はどちらかといえば周囲から与えられることが多かったでしょうし、あらかじめ敷かれたレールの上をあまり深く考えずに歩いてきたと思います。大学ではレールを敷く材料は用意してありますし、いろいろな敷き方をお教えしますが、レールを実際に敷いて、どんな列車をどのように走らせるかは皆さん自身にまかされるのです。大学は誠心誠意そのお手伝いをしますが、主役は学生である皆さん一人ひとりです。

2 大学でのまなびの実際

たとえば高校時代の夏休み、予備校に通って、そこで提供されている教科を自らの意思で選択し、習ったのではないのでしょうか。そのときの選択する基準というのは、〇〇大学に合格するためには、英語の点数を上げる必要がある→英語の中でもウイークポイントは、文法である→そこで、英文法について集中的に解説があるこの科目をとろうというふうに、目指す大学に合格するというゴールを見据えて、科目を選択したことでしょう。

大学の授業も同様です。皆さんが自分自身の4年後になりたい自分の姿を想像し、そのために必要な科目を選択するということが大切です。

ゴールは、入学した学科の学問の延長線上にあることが望ましく、まずは学部学科が示す専門課程の体系的なカリキュラムにより、基礎科目を受講することから始まります。ですから最初は不安でしょうが、迷うことはありません。もっともベーシックな科目は、多くの場合「必修」となっており、その後の専門を学修するうえでの基礎力が自然に身につくようにカリキュラムは設計されているからです。ただしその科目を合格しないと次の科目に進めない、ないしは卒業できないなどの制約が、カリキュラム上課せられています。

■単位制とは

高校時代は意識することがあまりなかった「教科に合格することについて、大学ではどういうことなのか、単位制を導入している高校を卒業した方は、ある程度想像できるかと思いますが、考えてみます。

大学では、「履修要綱」によって定められたルール（卒業に要するカテゴリーごとの要件）にしたがって、学科の理念であるカリキュラムポリシー（履修するための基本的な考え）を理解しながら、自己の興味と好奇心によって、学びの履歴を完結させていきます。

各科目の運営は、授業担当の教員にまかされており、60点以上を合格として、評価がなされます。合格をすると規定の単位を取得できます。単位とは国が定める「学校教育法施行規則」及び「大学設置基準」によって規定されているのです。

そもそも単位（credit）制とは、アメリカの高等教育システムで導入された、学位（degree）制度の基幹を形成する考え方です。その考え方は世界の単位制を導入している大学では、同じ定義と解釈をしています。つまり國學院大學が授与した「学士」（Bachelor of Arts）という学位をもってさえいれば、単位制をとっている世界中の大学院修士課程へ入学、または大学へ学士入学をする権利を保障されているのです。また世界中で学士の資格をもって職を得る権利を有しているともいえます。

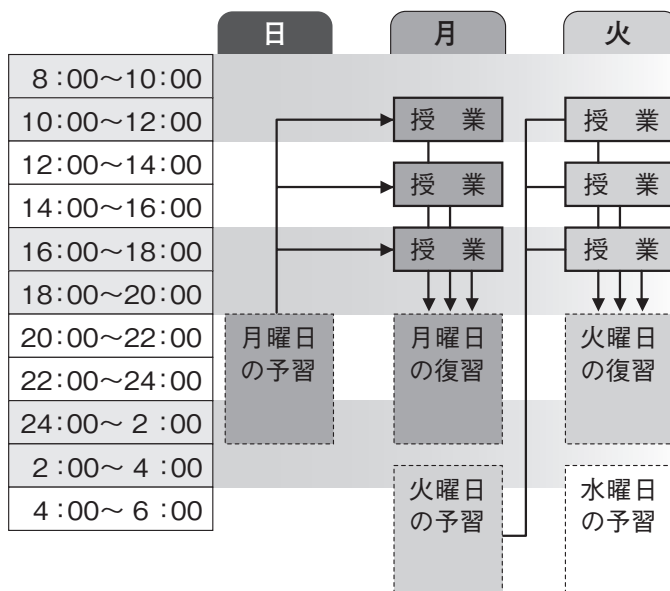
文部科学省が定める「大学設置基準」では、授業の性格によって細部は異なりますが、基本的には1単位は教室の内外で45時間の授業と学習（予習・復習・発展学習）をもって構成されています。これにもとづいて、國學院大學では、講義系の科目については半期（15週）で2単位、講義と実験や実習・実技を併用する科目では半期1単位と定めています。教養総合の「主題講座」などは前者に、「外国語」科目や「スポーツ身体文化」科目などは後者に該当します。なお、若干ながら、通年4単位の科目も残っています。重要なことは、1回90分の授業（これを 2 school hoursで「2時間」とみなす）に対して、**教室外の予習・復習の時間を含めて「単位」が設定されていることです**。しかも実際には、学修成果を試験やレポートの形で示さねばなりません。ただ教室に来て座っているだけでは「単位」の要件は満たしません。大学の学修成果の保証としての単位の認定には、自学・自習分が含まれているのです。けれども、1日は24時間ですから、履修登録したすべての科目に必ず一定の予習・復習の時間を割いたら、現実には寝る暇もなくなるでしょう。1年間の履修登録単位数の上限を定めている理由のひとつも、そこにあります。しかし、授業は「誰でも知っていること」「半分ぐらいの学生が知っていること」「ほとんど誰も知らないこと」

がミックスされているものであり、一から十まで予習する必要は必ずしもありません。予習で重要なことは、「わかる部分とわからない部分を区別する」ことです。予習してよくわからなかった部分については、特に注意して授業を聞きます。わかったと思っている部分についても、思わぬ誤解をしているときがありますから、きちんと聞かねばなりません。昔は「おさらい」などとも言いましたが、復習は学んだことを繰り返して練習して確実に身に付けるために重要です。必要な、肝要な部分について教室外でもきちんと学修することが求められているのです。あまり杓子定規に考える必要はありませんが、自分の怠け心に都合のいい考え方をされても困ります。学習効果を上げるためには、絶対に予習・復習は欠かせません。

単に卒業するためだけでなく、上乘せして教職・資格課程を取得しようと希望すると、これにプラスして学修活動が必要になり、大学が示す履修登録の上限の枠外での履修が可能のため勉強量が相当増えますから、学修計画について十分に注意する必要があります。

❷勉強と大学生活とのバランスを考えよう

学生生活には、課外活動としてのクラブ活動などで、共通の目的をもつ友人との交友を深めたり、他者理解の場として人間関係を学んだりすることも必要です。アルバイトを通じて社会との関わりや勤労の尊さを学ぶことも大変重要です。しかし学生の本分としての学修時間を大幅に削り、それらに費やしたりすることはどうでしょうか？ 学生の



日常のあり方としては、アルバイトは適切な職種を選択すべきであり、適度な時間内にとどめておくことが必要であることは、理解できることでしょう。

3 4年間を通した単位履修を考えてみる

さて、本学を卒業するためには、124単位を修得しなければなりません。この他にも必修科目や選択科目といった区別での修得単位の条件などが、各学科により定められています。そこで、このもっとも基本的な124単位という卒業条件をどう満たすことが適切かということについて、考えてみます。1単位の修得にどれくらいの学修活動が必要かということについて、先に述べました。これの最低124倍の学修量が4年間で必要ということになります。「4年後の自分」を考えた場合、もっとも多くの学生が該当するケースを具体的に検証してみましょう。

【企業に就職する場合】

現在の就職活動の詳細は、キャリアサポートの章に譲りますが、実際の活動期間の多くは3年生の後期から4年生の前期と考えてください。そのうちでも授業に出席できないような企業訪問、筆記試験・面接試験のための受験などの学外活動期間は、3年生の1月末から、内定の出始める4年生のゴールデンウィーク前後までと考えられます。会社などからの呼び出しは、2月・3月は別として、4年生の4月以降については授業などの予定も考慮してくれます。とはいえ一週間びっしりと時間割が組まれていれば、企業側としては、「4年にもなってそんなに授業が残っているのか。卒業できるのか。」と不安視されることは間違いありません。あるいは、それを恐れて授業を欠席して就職試験を受けに行くことを続けていると、授業に出席していないわけですから、その科目を合格することは困難になってゆきます。原則、就職活動とはいえ授業への出席の扱いとはなりません。就職活動を一生懸命にして、希望の企業から内定通知をもらったとしても、卒業ができなくて内定取り消しとなる場合が、毎年見受けられます。これは学生自身にとっても、内定先の企業にとっても、保護者の方々にとっても、そして大学にとっても非常に残念な結果です。

こういう事態を招かないように、どうすべきか？ 4年生での学修と定められている（開講学年が4年生のみと示されている）科目、例えば卒業論文、専門演習の一部、教育実習関係など以外については、3年次までに修得可能です。したがって表1のように、3年終了時点までに、112単位修得を目指すこと！ これが、卒業と同時に就職するための理想形です。

表1 理想的な単位取得

	1年次	2年次	3年次	4年次
年次別履修上限	42単位 ※注1	42単位 ※注2	42単位 ※注2	48単位
理想的な修得単位数(累計)	37単位以上	74単位以上	112単位以上	124単位以上
合格率	80.4%	77.1%	79.2%	

※注1) 1年次は前期のGPAが2.20以上であった場合に学年上限に4単位、

注2) 2年次・3年次は、前年の年度GPAが2.20以上であった場合に学年上限に6単位を加える。
4年次は一律48単位とする。

【公務員・教員希望の場合】

単位取得の目安は、企業の場合と大きくは変わりません。しかし、公務員試験はおおよそ6月以降に試験が実施されることが多く、国家公務員から地方公務員まで受験を続けると、全国をまたに駆けて受験の旅が続くことになり、授業への出席はさらに難しくなるでしょう。4年次に必修科目がない学部の学生は、3年間で卒業単位を満たすよう、早い時期からの準備が必要です。

また一般論として、国家Ⅱ種に合格するための平均的な勉強時間は、最低1,500時間、また地方上級(県庁)に合格するためには、最低2,000時間の受験用の勉強が必要と言われています。これについて、試験が4年生の6月に実施されると想定すると、入学から38ヶ月後ということになり、 $2,000\text{時間} \div 38\text{ヶ月} \approx 52.6\text{時間}$ ！入学後ほぼ毎日2時間、そのための受験勉強をしなければならないという計算になります。これに先ほどの予習・復習を足してみましょう。早い時期からの毎日の地道な努力と効率的な学修が必要なことが理解

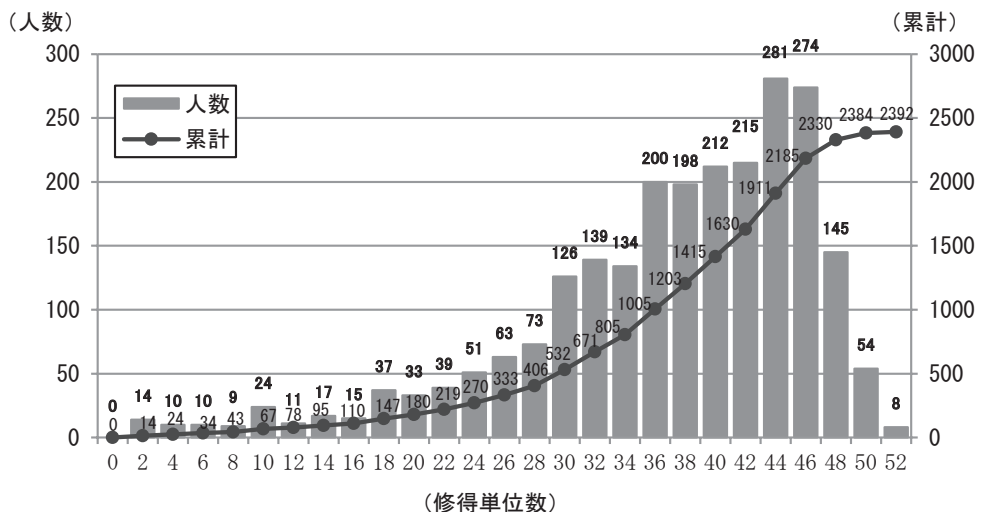


図2 平成24年度入学生の単位修得状況 (1年次)

できるはずです。

教員を志望する場合、4年生の5月から7月までの間に約4週間の教育実習に出向かなければなりません。昨今の教育現場の大変さというまでもなく、正課の授業案の作成や、課外活動の指導補助など、朝早くから夜遅くまで拘束されることを承知していなければなりません。つまりこの間は大学での授業に出席できず、企業等への就職活動も一切できないということになります。公務員、教員志望を問わず、継続的な努力とそれを始める決断は、早ければ早いほうが良いでしょう。

【大学院を受験する場合】

「21世紀は知の時代」と提唱したP. F. ドラッカーによると、知識社会とは、「継続的に知識を高めていかないと競争に勝ち残れない」社会のことです。高度な知識の不断の取得こそ、今後の社会に必要とされています。その知識修得の機会を博士課程に求めることは当然といえるでしょう。本学の場合は主として研究者養成を目的とした研究科であり、進学する際には4年間の学士課程のなかで絞られた研究テーマが明確に認識されていなければ、全く入学する意味はないでしょう。

本学の大学院の入学試験は、秋季（10月）または春季（2月）に実施されます。試験科目は「専門」、「英語」・「中国語」そして「口頭試問」・「研究計画」等が確認されます。まず大学院に進む目的を明確にしなければなりません。英語については、大学院では原書講読の必要性から、専門課程の教員による出題がなされます。学科のフィールドの関係原書を読解する訓練が準備になります。また最近では3年生を終了した時点での飛び級入学の制度を導入している研究科もあり、やはり3年生までの学修が大切になることはいうまでもありません。

4 どうすれば授業科目を合格できるか？合格の秘訣とは？

高校時代、すべての科目にきちんと合格し、卒業してきた皆さんにとっては、大学でも同様に4年間で卒業するものと考えているでしょう。にもかかわらず、実際は進級判定（本学では全学で2年生から3年生に進級する、更に経済学部は1年生から2年生に進級する際に、条件を課している）において約10%、卒業判定において約16%の学生が、失敗しているのです。これは同年次に入學した学生の約25%（4人に1人）が4年間で卒業できていない計算となります。なぜこんなことになってしまうのでしょうか？

本学の科目単位の合格率の平均が約75%であることから、データとして重なり合います。一科目を大切に学んでゆくこと、それを積み重ねてゆくことが4年間での卒業を可能にするといっても過言ではありません。

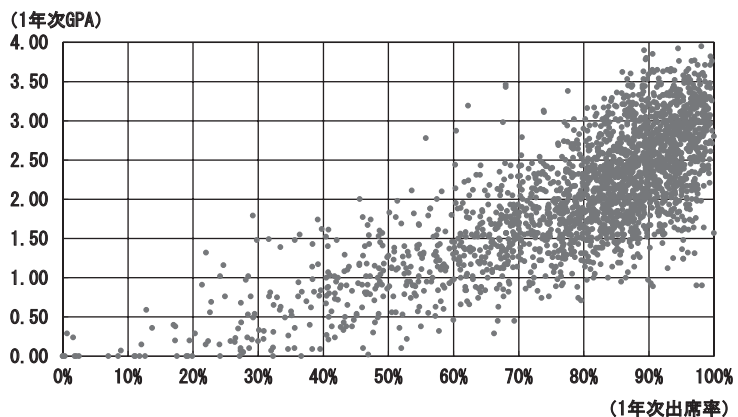


図3 平成24年度入学生 1年次出席率と1年次GPAの相関関係

それではどうすれば授業科目に合格できるので

しょうか。図3は授業への出席状況と成績の良し悪しの関係を調査したものです。明らかに授業に出席しなければ、良い成績を納めることができないことがわかります。大学の授業は高校時代の延長線上にあるとは思えない方がよいでしょう。もちろん高校までの学習は大学での学修の下敷きとなり、最もベーシックな知識として、皆さんを助けることでしょう。しかし大学でのまなびは、すべてが新しい学問・知識の修得だと考えてください。

1年次の皆さんが今何を必要としているか、これから新しい学問や知識とたくさん触れ合ってゆくことになります。それがあなたの力となることでしょう。そのためには毎日の授業にきちんと出席することです。自らが4年後になりたい自分を定めた、その積み重ねの第一歩として、自らが選択した科目にきちんと向き合うことです。日常的な学修活動こそが、合格の秘訣です！



5 授業での評価の仕方

高校時代は、それぞれの科目はどのように評価されていたのでしょうか？多くの場合、中間テストと期末テストの結果、授業への出席、参加度、宿題の提出……などを総合的に

評価するというのが一般的だったでしょう。本学の場合は、大きく次の4つの方法に分けられます。

①平常点評価

授業時の、出席、授業への参加度、発言の多少・質、宿題、小テスト、小レポートなど、日常の学修活動を総合的に評価する。

②授業時試験

通常、最終授業において、担当教員が直接試験を実施する。外国語科目の場合は、口頭試問（インタビュー形式）が実施されることもある。

③単位レポート

教員が指定した、テーマと形式に従って、定められた日時までに、教務課に提出する。締め切り時間は、NHKの時報をもって受理を終了するほど厳格である。

④期間内試験

高校時代の期末試験と同様に、一定期間が試験週間となり、試験用の特別の時間割が組まれ、一科目60分で試験（ペーパーテスト）が実施される。評価は、試験の良し悪しで決まる。

中等教育（中学校・高等学校の両方をさす）においては、大学受験を前提とした、あたかもそれを最終目的とするかのようなトレーニングが積み重ねられており、それは「設問に対してきちんと答える」という姿勢です。マークシートならば答えがわからなくても、マークだけはしましょうという受験テクニックを教えられたでしょう！ところが大学の試験問題は1行から2行の文章があり、あとは白紙の解答用紙が渡されるわけです。ペーパーテストにしても、穴埋めや選択問題はほとんどみあたらないと考えてください。

次に本学の試験の過去問題について、いくつか紹介しましょう。

①…について具体的な事例を挙げ、論述せよ。論述の際には、挙げた事例に対し、どのように考察し結論を導いたか明確になるように留意すること。

②…の要点を説明し、それに対するあなたの見解を述べよ。

③…についてその問題点、課題などについて解説し、さらに自分の考えも述べなさい。

④誤字脱字は、減点の対象とする。という親切なものまであります。

①～③のように論述の組み立て、あるいは考え方の筋道を親切に示している問いもありますが、多くの場合「～について記述しなさい」、「～について説明しなさい」といった、文章による解答を求められます。教員によっては試験の際に資料やノートを試験教室へ持

ち込むことを許す場合もありますが、一切許可しない場合もあります。

解答の際には、授業で講義されたことの確実な知識の修得と理解、日々社会で起こっている出来事への関心と理解、さらには先人が残してくれた書物からの知識など、多くの知識の中から、自分自身の考えをまとめる力を求められているのです。つまり考え方を問われているのであり、その考え方に則して論理的に正しい結論かどうかを問われることが多く、その方法を身につけることが必要となります。皆さんが大学生となり、学問や新しい知識と向き合う姿勢は、まさにこれが求められており、批判とそこから湧き出る疑問やそれを解決しようとする好奇心が学術を進展させていくのです。それが問題解決能力なのです。

6 大学で学ぶ意識

本学の履修要綱やリーフレットでは、“学習”ではなく“学修”という漢字を用います。これは広辞苑によると、“学習”は「まなびならうこと」とあります。これに対し“学修”は「学問を学びおさめること」とあります。皆さんが本学に入学し、社会的に生徒から学生になるということは、「学校教育法」によって定められています。そして多くの大学生は、在学中に、成人となります。“成人”とは「おとな。青年期に続き、心身の発育を終え、一人前になった者」とあります。

大学でのまなびは、「ならう」ことから「おさめること」へ大きな意識改革が必要です。大学でのまなびは、皆さんが自ら設計できること！ これは高校時代の学期初めに、時間割と教科書を手渡されたことを思い出すと大きな変更点です。高校時代は、実際の進路（進学先）は皆さんが決めたのですが、学びのゴールは、皆さんの意図にかかわらず、あらかじめ学習指導要領によって最低限の姿が決められていました。大学での学びのゴールは、皆さんが自らの責任で決めなくてはなりません。まなびの選択の自由が与えられていることと同時に、学ぶ義務とやり遂げる責任があることは、大学生としておとなとして、自覚してください。授業担当教員は、それを前提として授業運営を行っていることも認識しておく必要があります。つまり教員の側からすれば、「勉強したいから、この科目を自分で選んだのでしょ！」ということです。

そして最も重要なことは、大学4年間の学修にはゴールがあっても、それは人生全体にとっては“始まり”にすぎないということです。